

# 大学・学部別、高等学校までのキャリア教育とキャリア意識の形成について N私立大学理工学部、Y国立大学工学部・教育学部の比較検討

発表者: 中村 豊久\*、森本 信也\*\*、木村 隆文\*\*、渡部憲次郎\*\*、佐藤 弘幸\*\*\*  
\* 静岡大学 \*\* 横浜国立大学 \*\*\* 成蹊大学

## 1. はじめに

青少年の職業行動に関する課題としてフリーターや早期離職・転職の増加がある。フリーターについては、①企業の採用、②学校教育、③本人及び家庭に関する問題があると言われている。そこで学校教育について原因を探るために、前回私立大学について調査・分析したが、今回、国立大学でも同様な調査をし、比較検討したので報告する。

## 2. 方法

調査対象大学・学部は前報のN大学理工学部、今回のY大学工学部、Y大学教育学部であった。調査した年月は、それぞれ(2004.9、2007.10)、(2009.1、2009.7、2010.7)、(2010.7)であり、アンケート調査は授業中に行った。

### (1) 調査項目

調査は、以下の項目で行った。

- ①職業生活を意識し始めた年代
  - ②高校時代のキャリア教育
  - ③大学応募時に職業生活を考えた程度
  - ④大学入学決定の動機(理由)
  - ⑤大学の普通教科及び専門教科成績の自己評価
- (2) 調査対象者人数

N大学理工学部 105、Y大学工学部 127、教育学部 119名であった。

### (3) 回答方法とまとめ方

アンケートは、各項目について回答を求め、回収した。主なまとめ方は、下記の4つの回答項目(下記の①～⑤の記述)との関連をクロス集計し、その分布を調べた。

- ①卒業後は現在専攻している職業内容が生きる職業以外考えられない。(以降「同職種」と略記)
- ②卒業後は出来れば現在専攻している内容が生きる職業に就きたい。(以降「関係職種」と略記)
- ③卒業後は現在専攻している内容が生きる職業でなくて良い。(以降「拘泥せず」と略記)
- ④卒業後は現在専攻している内容と違う職業に就きたい。(以降「異職種」と略記)
- ⑤. その他

キャリア・アンカーを軸とした考え方からすれば、上記「①」がキャリア意識の形成が最も進んでいると考えられる。この考え方に基づいて以下の結果を考察した。

## 3. 調査の主な結果と考察

### (1) 職業を意識した年代について

私立大学のN大学理工学部は中学生までに約60%の者が職業を意識していた。それに対して国立のY大学は工学部が約34%、教育学部が49%であり、11～26%の差があった。これは、私立大学の附属高校の場合、高校一大学の継続教育を意識していることに関係していることが考えられる。

一方、高校卒業までには、Y大学教育学部が87%の者が職業を意識しており、最も高い割合を示した。これは、小学校時代から職業(教員)を意識してきたことによるものと思われる。

### (2) 高校でのキャリア教育の影響について

ここでは、多くの高校で行われていキャリア教育のポイントである次の3点を調査した。

- ①進路適性検査
- ②3年間における計画的キャリア教育
- ③進路に関する担任との面談

前報において、キャリア教育のうち職種選択に影響を与えているのは、担任との面談と上記①～③の3種類のキャリア教育であることがわかったので、その2点について調査した。

#### 1) 担任との面談の有無による職種選択への影響について

担任との面談が職種選択にどのように影響したかについて調査した。この結果、N大理工学部とY大工学部とは担任との面談が「あり」の方が「同職種」及び「関係職種」を希望する者が多いのに対して、Y大教育学部はむしろ「なし」の方が「同職種」を希望する者の割合が多かった。

この理由として考えられることは、教育学部の学生は、担任との面談の有無にかかわらず「教員」という職業を明確に認識し、希望しているためにキャリア教育の影響は少ないことが考えられる。

また、担任との面談があったグループで「異職種」希望は、N大理工とY大教育学部がそれぞれ2、3名と少なく好ましい傾向であったが、Y大工学部は8名いた。このことより、高校での担任との面談が大切なことを示した。

#### (3) 大学卒業後の職種希望について

大学卒業後の職種希望についてどのように考えているか大学・学部別にまとめた。

この結果、N大理工学部とY大工学部が同じ傾向を示し、「同職種」が17～21%に対し教育学部は

約 34 %と高い割合を示した。また、「同職種」と「関係職種」の合計は、3学部ともほぼ同じで 70 %前後であった。

(4) 大学応募の際、卒業後の職業生活をどの程度考慮したかについて。

下記の3つの項目から選択してください。

- ① 考えに入れて応募した
- ② 多少考えて応募した
- ③ ほとんど考えなかった
- ④ その他

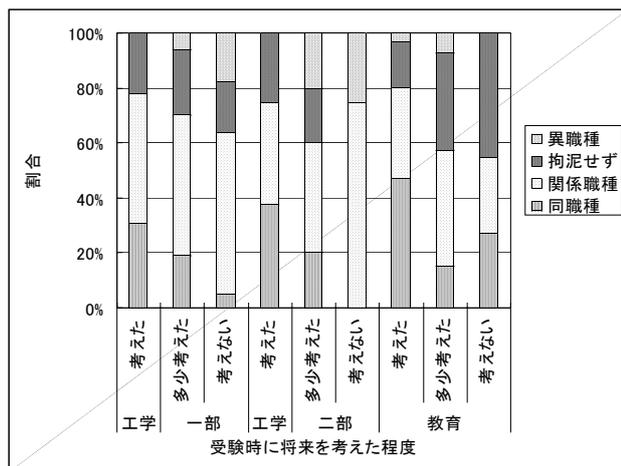


図1 大学応募の際に将来の職業生活について考えた程度と卒業後の希望職種の関係について

アンケートの結果から以下のことが判明した。

- ① 職業生活を考えて応募した順序は教育学部が最も多く 55%、次が工学部の二部で 42%、3番目が工学系の一部で 28%であった。この結果、工学部の一部では、教育学部の約半分しか考えていなかった。
- ② 工学部は職業生活を考慮して受験した学生の方が、同職種または関係職種を希望する割合が高いことがわかった。教育学部は、工学部ほど明確ではなかった。
- ③ 「考えない」のグループは工学部(一部)は、約 32%に対し、教育学部は約 9%と工学部の方が多いことを示した。工学部で「考えない」グループの内7名は「異職種」希望しており、キャリア教育の問題を浮き彫りにした。

#### (5) 大学の成績と希望職種の関係

大学での成績が希望職種にどのように影響するか調査した。

普通教科、専門教科別に「貴方は大学での成績は、同級生と比較してどの位だと思いますか」という設問に5段階で自己評価した。工学部の普通教科の結果を図2に示した。

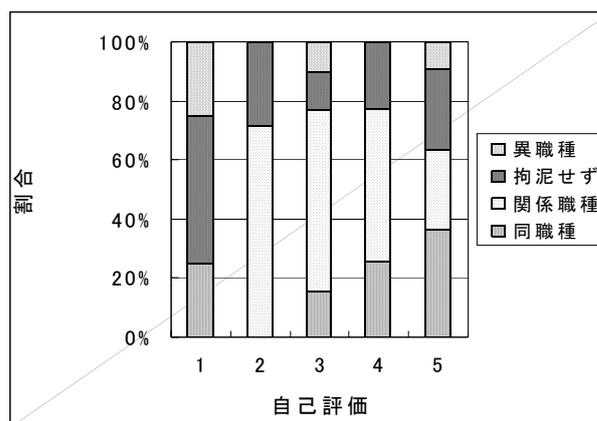


図2 工学部の普通教科の成績

図2の結果から、自己評価が3~5と「同職種」の関係では、ある程度の相関が認められた。しかし、自己評価と「同職種」+「関係職種」を合計した関係では、相関性は認められなかった。

#### 4. まとめ

- ① 3種類のキャリア指導を経験した学生と経験しない学生では、経験した学生の方が同職種に就きたいと希望する割合が多かった。
  - ② 担任との面談を経験した学生と経験しない学生では、経験した学生の方が同職種に就きたいと希望する割合が多かった。
- なお、上記①、②とも教育学部は、高校までのキャリア教育が、大学卒業後の職業選択に影響を与えていないことがわかった。
- ③ 大学応募時および決定時に将来の職業生活を意識して入学した学生ほど卒業後は、同職種にまたは関連職種に就きたいと希望する者が多いことがわかった。
  - ④ 工学部は教育学部に比べ異職種希望者が多いことがわかった。
  - ⑤ 卒業後の職種選択では成績の自己評価が高いほど、大学の専攻内容を生かした職業に就くことを希望する割合が多いことがわかった。
  - ⑥ Y大工学の一部と二部で以下の点が異なった。
    - (ア) 大学応募時に職業生活を「考えた」のは、二部の方が多かった。
    - (イ) 大学入学動機において、「その他」の理由(経済的理由)が 26%と多かった。
    - (ウ) 専門教科の自己評価の成績は、二部の方がわずかに良かった。
 その他の点ではほぼ同じであった。